

若者の「生きる力」を育む次世代教育

持続可能な社会づくりを担う
若者の「生きる力」を育むために
NPO法人LEAFとCELが共同開発した
第一次産業体験学習プログラムを実施した。
参加した学生の声と自己評価から、
次世代教育としての効果と課題を探る。

第一次産業 体験学習プログラムの 実施とレポート

総合的な学びの 社会デザイン研究

持続可能な社会づくりを担う児童・青年層の「生きる力(人間力・生活力)」を育むため、大阪ガス(株)エネルギー文化研究所(CEL)は、NPO法人こども環境活動支援協会(LEAF)(*)と協働して、2011年度から第一次産業を基盤とした総合的な学びの社会デザイン研究を行ってきた(中間報告は、情報誌『CEL』105号、

46〜49頁参照)。

最初の2年は、第一次産業を担う関連機関、団体等と研究会を設置し、50年後を想定した学びの社会デザインの検討を行った。そして、「総合的な生活力」は、「自然体験」、「生活体験」、および「社会体験」に裏打ちされた能力であると考え、第一次産業を体験することにより、「自活力」、「自然対話力」、「コミュニケーション力」、「協働する力」を育む体験学習プログラムを策定した。

3年目にあたる2013年度に、大

学生を対象にこのプログラムの実証試験を実施した。青年層の視点で学んだことを自己分析してもらい、総合的な生活力の向上状況やプログラムの効果などについて評価を行った。

第一次産業 体験学習プログラム

既存の体験学習プログラムは、ほとんどが農業体験であり、またその期間や回数も限定されたものである。今回策定した体験学習プログラムは、農業

だけでなく、林業および漁業も含めた第一次産業を体系的に体験する、年間を通じたプログラムである。また、単なる体験学習だけでなく、生物多様性、食とエネルギー・環境問題などの座学も組み込むとともに、食育、火育(*)の実習も取り入れた総合的な内容とした。さらに、各メンバーが、「第一次産業を通じた人材育成」、「教材としての第一次産業体験の価値を見出す」、「第一次産業における流通の役割」など、独自のテーマを設定し、この体験学習に参加した。

毎回の体験学習の最後にはミーティングを行い、その日の作業の振り返り、

各自のテーマの観点からの学びや気づきを報告し情報共有した。また、プログラムの中間期および最終期に、今までの活動のまとめを行い、プレゼン資料を作成し、研究会でひとりひとりが報告を行った。体験学習、座学、研究会での報告等合計年間32日のプログラム

ムとなった(Chart 1)。

プログラムの評価

このプログラムによる学生たちの生活力の向上、またその効果を検証するため、アンケート調査を行った。当初設定した4つの生活力(自活力、自然対話力、コミュニケーション力、協働

する力)に「問題解決力」を加え、その向上度を評価するための質問を59項目設定し、プログラム参加前後のそれぞれその力の保有度の状況を5段階評価で聞いた(Chart 2)。

59の評価項目のうち、30項目の評価が向上し、確かに生活力の成長が見られる。また、5段階評価とは別に、消費行動に関する優先順位を問う質問

(購入時の判断材料の順位づけ)も2項目入れた。「野菜」および「魚」を購入する際に、「価格」、「見た目」、「産地」、「旬」および「安全性」の5つの項目の優先順位を聞いたところ、プログラム参加後は、「産地」、「旬」および「安全性」を判断基準にする意向が強くなっている。これは、農地での四季を通じての野菜作りや漁業体験によ

Chart 1

体験学習プログラムの概要

大学生9名が
6分類のプログラムに
参加した

5大学、7学部(農学部、教育学部、家政学部等)の大学生9名が、2013年5月から2014年3月まで、合計32日43回のプログラムに参加。

Program

1

農業 (全19回)

- 田畑の耕耘
- 米作り
- 小麦作り
- 野菜作り
- 堆肥作り
- 野菜の漬物作り
- しめ縄作り



田植え

Program

2

林業 (全3回)

- チップ工場見学
- 森林の間伐現場の見学
- コープの森「社家郷山(しゃげどうやま)」の山登りおよび森林観察
- 森林間伐体験
- 薪割り体験



間伐

Program

3

漁業 (全4回)

- 牡蠣の養殖体験
- わかめの養殖体験
- 海苔の養殖および流通センター見学
- 漁場のセリ市見学



牡蠣の養殖

Program

4

座学(講義) (全7回)

- 学びの社会デザイン策定における背景
- 食とエネルギー、環境問題について
- 生物多様性について
- 兵庫県の農業・林業・漁業の現状と課題
- コープの森「社家郷山」の取り組み



講師のレクチャー

Program

5

食育・火育 (全4回)

- ライスサイエンスセミナー
- 魚のさばき方教室
- 巻き寿司作り
- 火おこし体験



火おこし

Program

6

研究会等 (全6回)

- 開講式
- 研究会(3回)
- 中間報告会
- 修了式



研究会での報告

アンケート調査でみた5つの生活力の变化

参加前 ■ 参加後

1 Ability

コミュニケーション力

協働作業における、メンバーの話を聞く力、メンバーに自分の考えや思いを伝える力

向上度が高い項目 ●相手の意見を丁寧に聞く ●自分の考えや思いをわかりやすく、口頭で説明できる ●1分間で、名前や人物を覚えてもらえる自己紹介ができる

3 Ability

問題解決力

現状の課題を抽出し、想像力を発揮して、その課題の解決策を提案できる力

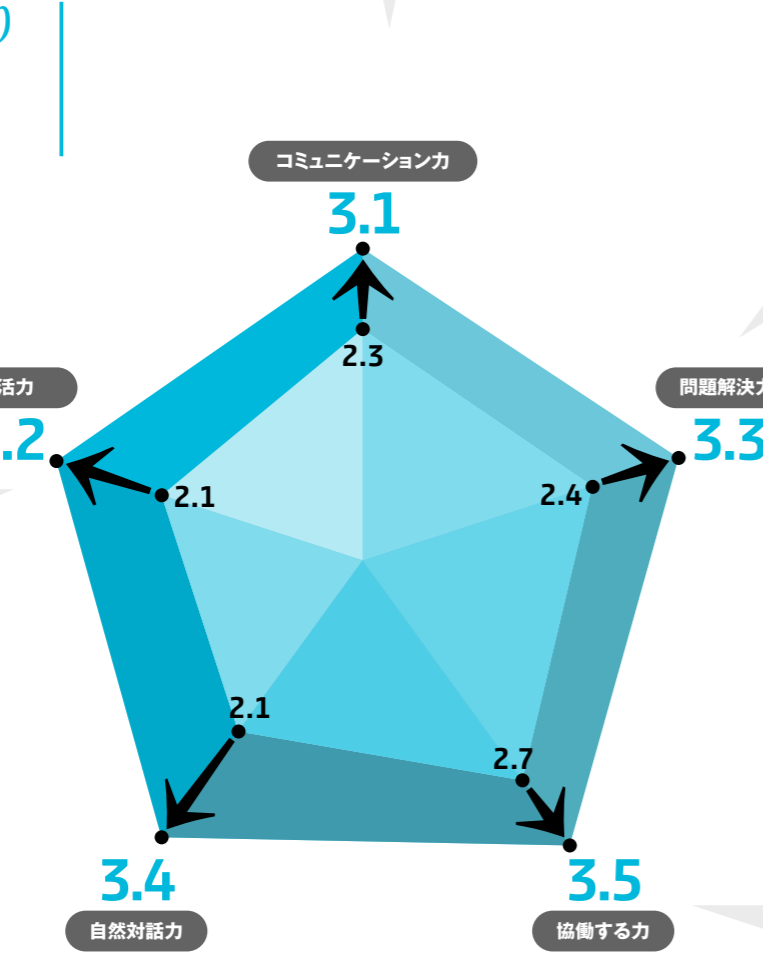
向上度が高い項目 ●現状を分析し、問題点や課題を抽出することができる ●課題解決に向けたプロセスを明らかにし、解決策・改善策を提案できる ●新しいアイデアを考え、新しい価値を生み出す創造力を身につけている

4 Ability

協働する力

集団行動や集団における意思決定、相互成長により身につく、ともに力を合わせ活動する力

向上度が高い項目 ●新規加入したメンバーやボランティアの人と進んで活動できる ●他のメンバーと連携・協働して活動を進めることができる ●目的意識を共有し、高め合って活動を進めることができる ●全体の目的、目標に向けた活動がとれる ●グループのリーダーの役割を担える ●社会、地域やプロジェクトのルール、人との約束を守る ●自分に与えられた仕事は、何事も嫌がらず行う ●安全な作業の進行管理や体調管理をすることができる



5 Ability

自然対話力

農林水産の体験を通じて、収穫に与える天候、気温、生物などの影響を予測できる力

向上度が高い項目 ●害虫、獣害から作物を守る方法を知っている ●季節の変化に敏感になった ●自然災害情報に敏感になった

プログラムにより向上した5つの生活力

2 Ability

自活力

年間を通じて農業の作業工程を責任をもって運営し、知識・技術を体得することにより身につく自ら生きるうえでの力

向上度が高い項目 ●米や野菜を作ることができる ●季節ごとの野菜の種類や植え付けの際の種や苗の種類がわかる ●作物栽培で、水やりや草取りの頻度がわかる ●農地の広さや農作業で使う長さの単位を知っている ●木材などを加工してものが作れる ●炊飯器を使わず、鍋でご飯が炊ける ●食べものの好き嫌いがなくなった ●山・川・田畑・海のつながりを理解している ●第一次産業の課題について理解している ●木製品の使用や購入の際に、産地や種類を意識するようになった ●日常生活や家庭での省エネ意識が高まった ●食べものを無駄に捨てない、ものを大事に手入れをして使うなど3Rに関する意識が高まった

学生たちの学び

プログラムの終了にあたり、学生たちはこの1年間の体験学習を振り返って、学んだこと、気づいたことなどを自己分析し、総合的な生活力の向上状況やプログラムの効果などについての最終レポートを提出してもらった。レポートの要点は以下の通りである。

- 環境への関心が高まり、さまざまな環境活動に参加することになった。また、人と人とのつながりや物事を多角的に見ることの重要性を学んだ。
- 農業に対する考え方が変わり、将来、生産者と消費者が近くなるような農業に関する仕事に就きたいという気持ちが強くなった。
- 農業体験にさまざまな学びがあることに気づき、小学校での教材価値を見出すことができた。
- 「食べものに感謝する力」、「食べものを選ぶ力」、そして「挑戦する力」が身についた。
- 「多くの人々と協力して作業できる力」、「野菜などに対する思いやりの力」、そして「物事を最後までやり遂げる力」を学んだ。

●第一次産業のありがたさやそれに携わる人の思いに気づいた。また、売られている野菜や魚にはすべてストーリーがあることを学んだ。さらに、生産者と消費者をつなぐ流通の果たす役割の重要性を実感した。

●メンバーとの協働により、自分にはない考えや、知識、感じ方があることがわかり、多くを学んだ。

●食料への感謝の気持ちが芽生え、農業の難しさや奥深さを感じた。

●人や人の気持ちに着目して物事を見るようになった。また、これからの社会づくり、まちづくりは、さまざまな視点から広く見渡してやっていかないといけないと感じた。

また、教育学部や家政学部の学生は、教師としてあるいは管理栄養士として、この体験学習で学んだことを、今後小学校や保育園で子どもたちに伝えたいと言っている。

プログラムを終了して、学生たちは社会人になり、あるいは進級したが、9カ月経過した時点で、今回のプログラムの成果が実際に活かされているかどうかのフォローのアンケートを行った。要点は以下の通りである。

- 自然と向き合う仕事の面白さや尊さを体感することができた経験から、「働く」ということの位置づけや金銭の価値について考えを巡らせることが多くなっている。
- 農に対する意識が強くなり、それが人生を決めるきっかけとなり、農業関係に就職が内定した。
- 小学校の生活の時間に農体験を活かして野菜を育てている。
- 小学校の生活の時間に、子どもたちに生産者の気持ちを伝えていく。
- ゼミで畑を借りて野菜の栽培をして

いるが、今回の経験を活かして、リーダー的な役割を果たしている。

●大学の食品学の講座において、今回の本物の食材と一から触れ合えた体験が非常に役に立っている。

●食育に対する自分の考えをもつことができ、来年から勤務する保育園において、管理栄養士として子どもたちに学んでほしいことがイメージできた。

●学んだ省エネや3R(*3)など、日々の暮らしのなかでできることを実行している。

この1年間、学生たちとともに活動して、学生たちの技能や意識の変化を感じた。農作業の技術は確実に向上し、第一次産業の従事者や食への感謝の気持ちも芽生えた。毎回の振り返りミーティングでは、最初の頃は発言が少なかつたが、回を重ねるごとに、自分の視点での発言が多くなり、自分の考えや思いを伝えられるようになった。また、農作業については、指示されなくとも、役割分担ができるようになり、メンバーと連携して活動を進められるようになった。さらに、この体験により、将来の進むべき道を見出し、これからの人生を考える者も出てきた。

体験学習終了後も、社会人としてあるいは大学生として、終了時の意識は維持されており、例えば就職に就いた

者は小学校での生活の時間にプログラムの内容を組み入れるなどの実践をしており、このプログラムは、確かに「生きる力」を育んだと言えるだろう。

だが、まだまだ向上すべき点もある。相手の気持ちや真意を読み取れる力、自分の考えや思いをわかりやすく文章で説明できる力、積極性、学んだことの日常生活への反映。これらの力の向上には、プログラムの構成、毎回の活動の目的・目標の明確化や進め方、体験学習の回数・期間等、今後検討すべき課題が残されている。また、この体験学習プログラムが、体制面、資金面などにおいて持続可能な事業となるような仕組みの検討も必要である。

持続可能な社会や生活の実現を担う若者の生きる力を育むため、これらの課題に取り組み、企業や行政の方々にも協力をいただき、この次世代教育を具現化していきたい。

← Chart 2

プログラムに参加した学生に、「コミュニケーション力」「自活力」「問題解決力」「協働する力」「自然対話力」に分類した計59項目の質問を行った。5段階(5:完全にあてはまる、4:ほとんどあてはまる、3:まあまああてはまる、2:ほんの少しあてはまる、1:全くあてはまらない)で回答してもらい、参加前、参加後の平均値を図にした。

(*1) 兵庫県西宮市を拠点に市民・事業者・行政の連携で、食・農・自然・環境などの社会的課題に取り組み、持続可能な社会システムづくりを目指しているNPO。

(*2) 安全な火のおこし方や扱い方、火を使った調理など、「火に親しみ、火を学ぶ」体験を通じて、豊かな心を育み、生きる力を高める教育のこと。

(*3) Reduce(減らす)、Reuse(繰り返し使う)、Recycle(再資源化する)の3つの単語の頭文字をとり、廃棄物の削減に努め、生き残るべき考え方を示した言葉。